

雪 女

小 川 未 明

雪の降る、北國の小さな町の話であります。みち子ちゃんのお母さんは、みち子ちゃんが、やつとお母さんのお顔が分るやうになつたころ、病氣のために、なくなつてしまはれました。お母さんは、小さいみち子ちゃんを残して行くことが、そんなに心がかりだつたでせう。

「私は、たゞへ遠いところへ行つても、子供たちの身の上を守りますよ」
と、おつしやいました。そして、長女の花子さんに、妹の世話を頼んで、この世から去られたのであります。

みち子ちゃんは、やさしいお姉さんがあつたけれど、あのなつかしいお母さんのお顔を忘れることは出来ませんでした。時々思ひ出しては泣きました。

「お、お母ちゃんを思ひ出したんですか」

お姉さんは、いろくみち子ちゃんをいたはりましたが、やはり、みち子ちゃんは、泣きつ

つけたのです。花子さんは、さうしていゝか分らなくなりました。

「お母さんが、いらして下さつたら、私たちは、みんなに仕合だつたでせう」

ミ、自分もいつしか涙ぐむのであります。しかし、自分が泣いては、小さな妹が、かはいさうださ氣を取り直して、

「さ、おんもへ行つて、お母ちゃんを見てまゐりませう」

ミ、花子さんは、みち子ちゃんを負つて、家を出るのでした。いつしか、それが例ミになりました。みち子ちゃんが泣き出すミ、

「さ、おんもへ行つて、お母ちゃんを見てまゐりませう」

そして、空に、まんまるく浮んだ月をさして、

「あれ、のゝちやんね、お母ちゃんは、あそこにいらつしるのよ」ミ、いつたのであります。

みち子ちゃんは、お姉さんの背中中、ちつと月を見上げてゐました。その涙のたまつた清らかな眼の中へ、お母さんのお顔が映つたのでありませうか。

「お母ちゃん」ミ、みち子ちゃんは、からだを振つて、喜ぶのであります。

花子さんも、いつしよになつて、月をながめてゐました。するミ、やはりなつかしいお母さんのお顔が思ひ出されて、熱い涙が、自然ミ頬を傳つたのであります。

「さあ、もうお家へ歸りませうね」

夜風が、冷たかつたので、みち子ちに風を引かせてはいけないと思つて、來た道に戻るのでした。

やがて、秋が過ぎて、冬になるまで、早くも雪が降りはじめたのです。

町の子供たちは、道の上へ、雪達磨や、雪女を造つて遊びました。中には、雪のお城を造つて、戦争ごっこをしたのもあります。しかし、日が暮れるまで、どこでも早くから戸を閉めてしまひました。

みち子ちゃんは、こんな晩でも、お母さんを思ひ出す泣いたのでした。

「お母ちゃん、おんも……」と、いつて、せがんだのであります。

「けふは、外が寒いので、花子さんは、いつたけれども、みち子ちゃんには、分りません。仕方なく、やさしい姉さんは、ねんねこで、みち子ちゃんを負つて、北國の町にだけしか見られない、雁木の下を歩いたのであります。

物凄いやうに冴えた月は、雪の上を照らしてゐました。町の四角のまころへ來るまで、雪女が立つてゐたのです。子供達の手でこしらへたにしては、美しい姿に出來てゐて、黒い眉、赤い唇をしてゐました。

「かあちゃん……」と、みち子ちゃんが、いひました。

「みち子ちゃん、お母ちゃんに見えて」と、花子さんは、立止りました。

「かあちゃん」

と、みち子ちゃんは、小さな手を出して、雪女に抱かれやうをしました。

「また、明日の晩来て見ませうね」

花子さんは、みち子ちゃんの機嫌が直つたので、お家へ歸りました。

次の日の夜は、殊に寒く、さらさらといつて、小雪が窓に當つてゐました。みち子ちゃんが、泣きましたけれど、今夜は、外へは出られませんでした。するこ

「今晚は」

と、誰か、戸をたゞいて、呼ぶ聲がしました。出て見るこ、體の雪を拂ひながら、女の人が入つて來ました。

「赤ちゃんが、お母さんをお慕ひなさるさきよりました。私は、かはいゝ子供をなくして乳が張つて困りますから、さうぞ赤ちゃんに飲んでいたゞかうと思つて上りました」と、女の人が、いひました。

「まあ、それは、ご親切に有難うございます」と、家のものは、お禮をいひました。

みち子ちゃんは、女の人に抱かれて、おいしさうにおつばいを飲んでました。

「私は、こちちへついでがありますので、また、明日の晩もまゐりますから」ミ、いつて、女の人は、立去りました。

五日目の晩のこゝです。女は、歸る時に、「ごんごは、しばらく來られませんが、もし、なくなられたお母さんが、赤ちゃんの、こんなに達者でお育ちになつたのをお知りなされたら、みんなにご安心なさるでせう」ミ、いひました。

家のものは、女のいつたこゝが、妙に心に残りました。花子さんは、こゝかで見たこゝの顔だが、こゝの人であらうミ、氣付かれないやうに、その後をつけたのです。女の姿は、町の四角のこゝろまで行くミ、煙のやうに消えてしまひました。

そこには、いつかの雪女が、もう溶けて、なくなりかけてました。見たこゝのある顔だミ思つてゐた花子さんは、

「あつ」ミ、いつて、おぎろいたのであります。

空にいらつしやるお母さんが、雪女をお使ひにおよこしなされたミ知れたからであります。